持ち込まれたペットアカミミガメの分析（その1）

金　香星・谷口　真理・亀崎　直樹

Analysis of the red-eared slider turtles brought by people.

By Hyang seong Kim , Mari Taniguchi , and Naoki Kamezaki

は じ め に

神戸市立須磨海浜水族園に野外で駆除されたミシシッピアカミミガメ（以下、 アカミミガメ）を収容することを目的とした飼育施設、亀楽園がオープンした。2010 年 8 月 7 日のオープンより 1 カ月間、多くアカミミガメが持ち込まれた。しかし、持ち込まれた個体の 72.6%が野外で捕獲された個体ではなく、飼育されていた「ペットガメ」であり、本来の亀楽園の目的に反するものであった。

何故このように多くの「ペットガメ」が持ち込まれたのだろうか。人々がカメを飼育する理由、そして、手放す理由は一体何なのだろうか。本研究では、亀楽園に持ち込まれたペットアカミミガメに関する情報を飼育者より収集し、飼育、そして放棄の実態を明らかにすることを試みた。今回は入手の経路と飼育年数に関する分析結果を報告する。なお、本研究は第一著者の金が関西学院大学社会学部の卒業研究として実施したものである。

方 法

2010 年 8 月 7 日から 9 月 7 日までの 1 ヵ月間に、亀楽園に持ち込まれたアカミミガメのうち、ペットとして飼育されていた 587 個体の飼育者から、様々な情報を聞き取った。今回使用した聞き取り事項は、入手年月日、入手方法、入手場所に関するもので、それらを分析することによって、飼育者がどのようにしてアカミミガメを入手したか、また、何年間飼育したのかを分析した。

結 果

持ち込まれたペットアカミミガメの入手方法を表 1 に示した。ペットショップ等で購入した個体（以下、ショップ個体）が 210 個体で全体の 35.8%を占め最も多く、次いで野外から捕獲し飼育されていた個体（以下、野生飼育個体）が 154 個体（26.2%）、まつり等でのカメすくいにより入手した個体（以下、まつり個体）が 149 個体（25.4%）を占めた。これら 3 つの入手方法で全体の 87.4%を占める結果となった。上記 3 つの入手方法に次いで多かったのは、他人からもらいうけたもので 39 個体（6.6%）を占めた。もらいうけた個体には、繁殖した子ガメを知人より譲り受ける、誕生日プレゼントとしてカメをもらう等が含まれていた。次に多いクレーンゲームの景品として入手されたものは、UFO キャッチャーと称されるゲーム機器の景品として使用されているカメを指し、14 個体（2.4%）であった。その他には、店舗での無料配布等が含まれる。

聞き取った入手年月日より飼育年数を求めた。飼育年数は、入手方法別、すなわちショップ、まつり、野生飼育個体を別々に分析した(図1)。入手方法別の平均飼育年数はショップ個体が10年(範囲0カ月－40年)、まつり個体が8年6ヵ月(範囲0カ月－35年)、野生飼育個体が3年9ヵ月(範囲1カ月－20年)で、ショップ個体が最も長く飼育され、野生飼育個体がはやく手放される傾向が明らかとなった。ショップ個体、まつり個体はともに飼育年数が 10 年にモードがあるものの、それ以上飼育されるのはショップ個体の方が多かった。野生飼育個体は、飼育年数 1 年未満の個体が 32.5%を占め、飼育開始後間もない段階で個体が手放されていた。また、いずれの入手方法においても飼育年数が21年以上の個体はなかった。

表1 飼育個体の入手方法の内訳

由来	個体数	%
ペットショップより購入	210	35.8
野外より捕獲	154	26.2
まつりのかめすくいにより入手	149	25.4
貰いうける	39	6.6
ゲームセンターの景品	14	2.4
その他	13	2.2
不明	8	1.4
計	587	

考　察

亀楽園に持ち込まれたペットアカミミガメの由来は、ペットショップで購入したものが最も多く、全体の 35.8%を占めた。また、正確な値は出せなかったが、これらの個体は動物を主な商品として取り扱う専門店舗からではなく、一般にホームセンターと称する大型商業施設の「ペットコーナー」で入手する場合が多い印象を受けた。ホームセンターでの購入は、ペットショップでの購入に比べ、衝動的に、あるいは偶発的にカメを購入することが多いという印象も受けた。すなわち、購入を計画していなかった人が、たまたまカメを見て衝動的に購入するケースが多いということである。

次いで多かったものは、野外から捕獲して飼育されていた個体(野生飼育個体)であり、26.2%を占めた。これはアカミミガメが自然環境で広く生息し、日本の淡水生態系の中で主要な構成種であることを改めて確認することとなった。

次いで、まつり個体は 25.4%を占めた。まつりやイベントなどで露店として行われるカメすくいでは、ペットショップでの購入より、はるかに高い割合で衝動的入手が発生していると思われた。つまり、まつりに出かけ、カメすくいの露店をみつけ、興味本位でカメすくいを体験した後に、そのまま特に愛情もないカメを自宅に持ち帰り、飼育するケースが多いということである。これは飼育意欲の欠けた状態での飼育開始であり、このような場合において飼育放棄や、野外への放逐が起こりやすいと考えられた。また、飼育カメに占めるまつり個体の割合の多さは、別の懸念を抱かせる。つまり、露店でカメすくいを行った場合、まつりのシーズンが終わった後に多量にカメが余ることが想像できるのである。それが露店商によって野外に放逐され、それが自然におけるアカミミガメの分布拡大や個体数の増加に繋がる可能性がある。

飼育年数に関しては、野生飼育個体が平均 3 年 9 ヶ月と最も短く、他の由来と比較した時、圧倒的に早い段階でカメが手放された。このように飼育年数が短い要因は次のように考えられる。まず、カメに対する「愛情」の欠如である。野生由来のアカミミガメは、多くの飼育者が飼育したがる幼体ではなく、既に成長し、場合によっては成体となっている個体も多く存在する。その為、ペットショップ由来のカメよりも相対的に大きく、時には人に噛みつこうとすることもあり、それらがカメに対する愛情を低下させている可能性がある。あるいは、野生由来の個体を限られたスペース内で飼育することでカメに対する罪悪感が生じ、それが手放す原因となっている可能性も考えられる。つまり、罪悪感から自然環境に個体を返そうとする心理が働き、遺棄にいたると思われる。実際に野生飼育個体の持ち込み者の多くがカメを手放す理由として、水槽が狭くて可哀想だったをあげている。今後、一度捕獲した個体に対し、再び野外に放さぬよう啓発することも必要となってくるだろう。

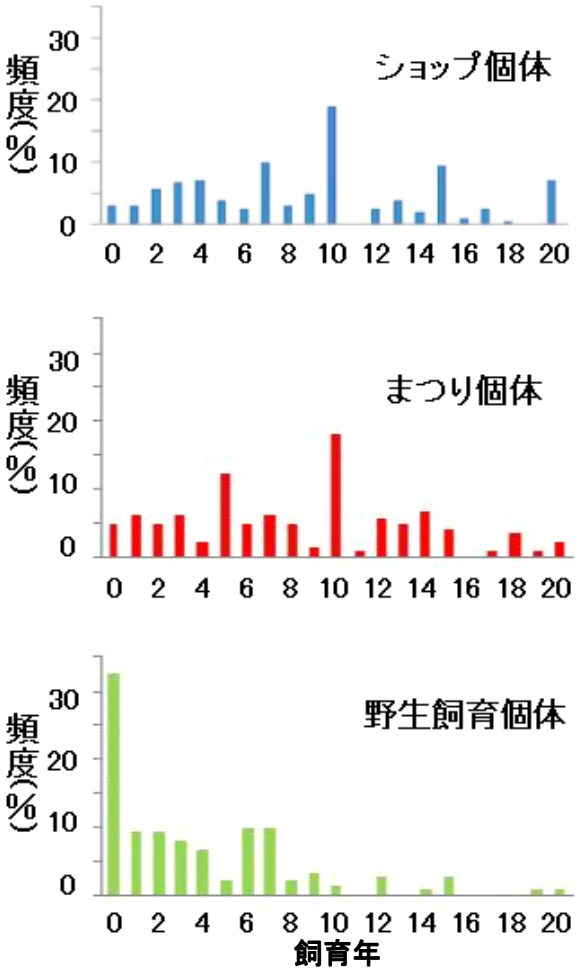

図 1 入手方法別の飼育年数の割合

逆にショップ個体は、相対的に長い年数にわたって飼育されている。ショップ個体は、飼育者が能動的に飼育を開始する場合が多いと予想され、それが手放すまでの年数を延ばす第一の理由と考えられる。また、「動物の愛護及び管理に関する法律」の第八条四では、販売者は事前に種の特徴、個体情報、飼い方等必要な情報を説明する義務がある(2006 年改定より義務化)としている(総務省 HP)。これは爬虫類を販売する場合も例外ではなく、アカミミガメの衝動的な購入を防止する上で、一定の効果をあげているのではないだろうか。

しかしながら、事前説明が全ての購入希望者に対して適切に行われているかと言えば、決してそうでもないようだ。環境省の販売時の事前説明の有無に関するアンケートによると、ペット購入時の事前説明の有無に関して、爬虫類では 30%が受けていない、20%がわからないとの回答を得ている(環境省 HP)。安価で容易に入手できるアカミミガメに関しては、さらにその割合が低くなるだろう。今後、販売者が購入者に対し、種の特性を適切に説明することが、衝動的な購入を防止する上で重要であると考えられる。

今回の調査によって、ペットのアカミミガメの入手方法は多様であること、また入手方法に

よって、飼育年数に差があることが明らかとなった。本当にカメの飼育を希望する人間は、主にペットショップでカメを入手しており、飼育年数も相対的に長くなっている。一方、まつり等では衝動的な入手が発生しやすいと考えられ、これが飼育年数の短くなる原因となっていることが予想される。その為、衝動的な購入を誘発するまつり等でのカメすくいは、何かの形で規制するのが望ましいと考えられた。

謝辞

本研究で用いたアカミミガメはすべて市民によって持ち込まれた。終わりに聞き取り調査に協力いただいた方々に感謝申し上げる。

引用文献

総務省　http://law.e-gov.go.jp/cgi-bin/idxsearch.cgi（閲覧 2011/01/16）

環境省　中央環境審議会動物愛護部会第 26 回資料(平成 22 年)

http://www.env.go.jp/council/14animal/y140-26.html（閲覧 2011/01/16）

市民参加型調査「親子 de かめ GET」スタート

谷口真理・亀崎直樹

Project of the fresh water turtles researched by family.

By Mari Taniguchi and Naoki Kamezaki

人はそこに当たり前にあると思っている身近な自然の変化に対して、鈍感であるものです。例えば、私たちにとって当たり前に川や池でみかけるカメは、いったいどんな種類で、どれくらいすんでいるのでしょうか。日本の本州、四国、九州にはニホンイシガメ(以下、イシガメ)、クサガメ、スッポン等が生息しているといわれていますが、近年、外来種ミシシッピアカミミガメ(以下、アカミミガメ)が侵入し、在来のカメを脅かしていると言われています。当たり前にみかけられていたイシガメが、最近みられなくなった。子ども頃、当たり前にみかけていたイシガメがいつの間にかアカミミガメになっていた。そんな経験はあるのではないでしょうか？

実際、日本の河川や湖沼はもはや外来種アカミミガメだらけです。しかし、日本全域でどの程度の数のアカミミガメが侵入しているか、イシガメはどこに生き残っているのか、と言う素朴ですが基本的な情報は非常に少ないのです。そこで必要となってくること、そして私たちにできることは身近な自然のモニタリングです。

モニタリングとは、変化を記録にすることです。例えばどこその池に何年何月何日にイシガメがいた、ということを残すだけでも立派なモニタリングです。近所の川でカメを見かけたら、写真をとって記録するだけでも何年もすれば、変化を知るための重要な記録になるのです。しかし、現段階ではその情報を収集し、蓄積する体制は確立されておらず、ま